



202101-1

地域ブランド「丹波焼」丸八窯×水墨画家 Lin Sieii

### Lin Sieii の肉筆、のびやかに彩る、自由な丹波焼

台湾出身の水墨画家 Lin Sieii さんが、丹波の地域ブランド「丹波焼」窯元 丸八窯さんとコラボレーションした陶器シリーズがこのほど完成しました。2020年12月12日からオンラインショップと小宇宙食堂（神戸市須磨区）で販売が始まりました。



生物曼荼羅

plate(d) 13x13x1.3 cm  
丹波焼 釉薬  
実色 藍色 黄 赤茶色



生之誕

plate(d) 13x13x1.3 cm  
丹波焼 釉薬  
実色 藍色 黄 赤茶色



天使之風(L)

plate(d) 19x19x1.3 cm  
丹波焼 釉薬  
実色 藍色 黄 赤茶色

#### 写真1 「丹波焼×Lin Sieii」陶器シリーズ

出典：<https://mumudatsu.wixsite.com/sieiiin-2021/%E5%89%AF%E6%9C%AC-art-work>

地域ブランドに強い関心を持ち、地域ブランドとアートのコラボレーション活動を支援している大江山特許商標事務所の弁理士 岡恵が、丹波焼の窯元 丸八窯さん（兵庫県丹波篠山市今田町）を訪ね、陶芸作家である清水義久さん、そして水墨画家の Lin Sieii さんに今回の取組についてお話を伺ってきました。

#### ■「丹波焼」とは<sup>1)</sup>

瀬戸、常滑、信楽、備前、越前とともに日本六古窯の一つに数えられています。その発祥は約850年前、平安時代末期に遡ります。『丹波焼、立杭焼、丹波立杭焼など様々な名称で呼ばれてきた。古い文献によると、丹波地域の焼き物を称して「丹波焼」と呼んでいたそう。』と清水義久さん。『もともと四斗谷（しとたに）川流域に多くの窯元が存在していた。現在窯元の多くが立杭地区にあることから、立杭焼と呼ばれるようになったと聞いている。母親（陶芸作家の清水久美子さん）も、立杭焼と呼んでいる。しかしバラバラな名称では、消費者の方が迷われてしまう。そこで「丹波焼」として名称を一本化すべく地域団体商標の登録を行った』と説明くださいました。

このような経緯で、2018年1月18日付けで、丹波立杭陶磁器協同組合が出願した地域団体商標の「丹波焼」は登録されました（登録第6010168号）。現在、同組合には約50軒の窯元が所属しています。

#### ■「丹波焼」の魅力<sup>2) 3)</sup>

丹波焼とは『鑑定したとき、どこの作風にも属さない焼き物が「丹波焼」だと言われるくらい、個性豊かな作風が特徴』と清水義久さん。



写真2 作品名「丹波土瓶」



写真3 作品名「丹波花生」

清水さんの作品には、丹波の土や空気が、器のきめの中に閉じ込められたかのような、独特の味わいがあります。ほっとするような、シンプルな暮らしの器です(写真2, 3)。

プロジェクト「TANBA STYLE」は、「丹波焼を通じて何か新しいことを」ということで、2013年に6人の丹波焼作家で発足した新たな取り組みです。現在8人の丹波焼作家で構成されるこのプロジェクトでは、現代の丹波焼として、暮らしになじむ、モダンな形、色の器が提案されています。プロジェクト開始2年目から、清水さんもこのプロジェクトに参画されています。

#### ■水墨画作家 Lin Sieii さん

台湾出身の Lin Sieii さん（総合アート修士）は、国立台湾芸術大学卒業後、10年前に交換留学生として来日されました。伝統的な水墨画の技法に、モダンなポップさが加わった独特の作風にはファンも多く、料理活動家でもある Lin Sieii さんのお店「小宇宙食堂」（神戸市須磨区）には、水墨画の原画がそこかしこに飾られています。「with コロナの時代、絵画と物語、台湾の食養生料理と食文化、これらを両面から発信して、お客様に心身の健康を届けたい」と Lin Sieii さん。

## ■丹波焼と台湾水墨画作家の出会い

Lin Sieiiさんは、たまたま訪れた兵庫陶芸美術館で、同美術館のサポーターの方からの紹介の形で丸八窯さんとのご縁ができたそうです。清水義久さんは、「当初、一般の絵付け体験の方かな、と思った。数枚絵付けして満足されるのかと思ったら違った。自分は絵がかけないので、釉薬や、筆遣いなどで表現しているが、絵付けをすところなるのかと感じた。器全面に1点ものの絵付けを行うのは、丹波焼では珍しいこと。」と振り返ります。一方、Lin Sieiiさんによれば「台湾では、伝統工芸品に書家や水墨画作家が作品を描く、コラボレーションはよく行われている」そうです。

今回コラボレーションが行われたベースとなる丹波焼は、伝統の「白丹波」という白釉を使用した器です。持った時の特有のざらざらした手触りを醸し出すために、表面をスポンジでこまかくパッティングするという、気が遠くなりそうな手作業が、一枚ごと、丁寧に、清水義久さんの手により施されました。その上に、Lin Sieiiさんののびやかな筆運びによる絵付けが行われたのです。下絵など一切書かず、まるでライブアートのように、さらさらと白丹波の上に、筆が踊ります。深みのある紺色は「呉須」、茶色は「鉄」の顔料です。

1点、1点の手造りのため、大量生産される陶器とは全く違う、たたずまいを感じます。清水義久さん、Lin Sieiiさん、二人の作家が織りなす、新しい「丹波焼」そのものです。「丹波の地を訪れると、心がほっとする。」とLin Sieiiさん。今回の一連の陶器シリーズは、「生命的完整」というテーマのもとリリースされています。1点ごとに作品名が付され、シリアル番号で管理されています。柔和でほほえみを絶やさないLin Sieiiさんからあふれる生命の喜びが、作品に昇華しているようです。

今回のコラボレーション作品は、生活の器としても、アート作品としても楽しめる、上質な暮らしを彩る器といえるでしょう。

## ■地域ブランドとアートの融合

地域ブランドが継続的に発展してゆくためには、伝統の中にも新鮮さを失わない仕掛けや取組が求められます。その意味において、今回の「丹波焼×Lin Sieii」のコラボレーションは、地域ブランドとアートを融合させた、付加価値戦略の一例です。「丹波焼×Lin Sieii」のコラボレーションは、続編の制作も確定しており、ますますこれからが楽しみです。

(文：岡 恵、写真撮影：アハマともみ)



写真4 澄み渡る丹波篠山の冬の朝  
(2020年12月22日撮影)



写真5 丸八窯さんのギャラリー兼店舗



写真6 インタビュー風景

左 丸八窯 清水義久さん 右 岡 恵

中央: 白い絵付け前の器、青い釉薬が神秘的な丹波焼の器



写真7 丸八窯さんの工房の様子



写真8 青く美しい丹波焼を眺める Lin Sieii さん  
この器は、Lin Sieii さんのお店で用いるルーロー飯用の器になるそう。



写真9 Lin Sieii さんのリトルプレス第2号「人良食」を清水義久さんに紹介中。



写真10 清水義久さん作  
下部のへこみ模様が、しのぎ（鍋）の特徴



写真11 清水義久さん作 写真10の器を裏から見た写真



写真 12 次回作の絵付けを行う Lin Sieii さんの道具 左より絵筆セット、呉須、器 2 セット



写真 13~14 さらさら 白丹波の上に、Lin Sieii さんの筆が楽しそうに。



写真 15 完成した作品



写真 16 清水義久さん（左）と Lin Sieii さん（右）

### 【丸八窯】

陶芸作家 清水久美子 清水義久

所在地 〒669-2135 兵庫県丹波篠山市今田町上立杭 363-1

お問合せ 電話 079-597-2102 URL <https://tanbayaki.com/kamamoto/45/>

### 【Lin Sieii】

料理活動家・水墨画家 台湾家庭料理教室「小宇宙食堂」主宰。

所在地 〒654-0054 兵庫県神戸市須磨区須磨本町 1-1-3

お問合せ 電話 080-5781-8805 URL <http://shouchu-shokudo.com/>

### 【大江山特許商標事務所】

所長弁理士 岡 恵

所在地 〒651-0086 兵庫県神戸市中央区磯上通 4 丁目 1-14 三宮スカイビル 7F

お問合せ 電話 050-5358-4585 URL <https://o-ip.pro/>

### <参考文献>

1. 丹波伝統工芸公園 立杭 陶の里ホームページ <https://tanbayaki.com/process/>  
(2020年12月27日アクセス)
2. TAMBA STYLE ホームページ <https://tanbayaki.net/> (2020年12月27日アクセス)
3. TAMBA STYLE HYOGO JAPAN リーフレット